

---

処女と一角獣 An Endangered Species

木野目理兵衛

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

処女と一角獣 An Endangered Species

### 【Nコード】

N9175D

### 【作者名】

木野目理兵衛

### 【あらすじ】

ロリーナ・ドジソンは、叔父ハーバートとの密やかな愛を育む少女。田舎の夏の午後を退屈気味に過ごす彼女の元を訪れた彼に、ロリーナは心躍らせるも、しかし何処か満たされず。そんな中、近くの森で一角獣を見たという話を聞いた彼女は、一角獣を一目見よう森へと向かう。

処女と一角獣 An Endangered Species

モンスタージョークとは(前書き)

洋画レベルの性描写があるので、苦手な人はご注意ください。

## モンスタージョークとは

「モンスタージョーク」とは、エルフやゴブリン等の人種化した保因者・亜人種、(真)竜、一角獣等の近年に至るまでその存在が伝説上とされていた者達、をネタにした言い回し、一種のブラックジョークである。

主に質疑応答形式で行われるこのジョークは、十九醒紀半ばから二十醒紀半ばの間に皇火圏で流行した。その背景には幻獣、或いは亜人種が、学術的に認知されると共に、人間社会に進出していったという歴史的事実が大きい。

通常の間とはその生理一切が異なる場合が多い為に亜人種と人々の間にはいざこざが絶える事が無かった。そうして起こった事件は、笑ってはいけないのだが、笑ってしまったくなる様なものが数多く、それらを土台にして、様々なジョークが作られていったとされる。

例：Q：吸血鬼の彼女と付き合う上で、最も重要な事は？ A：歯磨き

但し、実際そうだった事件があったという裏付けがあるものは少なく、多くのジョークがそうである様に、話されている間に誇張や尾鰭がついたと思われる。

またこれらのジョークの中でも亜人種へのそれは、彼らへの差別蔑視とされ、公の場で使われる事は余り無くなった。ジョークが作られた当時と違い、一般の人々にその生理現象が深く理解され、亜人種達の多くがごく普通に社会に溶け込んでいるという現代の状況もそれに起因している。

ただ、年配の皇火人には、未だに根強い偏見を持った者も少なくなく、そうした人達は好んでモンスタージョークを口にする(そも

そもこの名称自体が差別的なものとして、別の言葉が考案されたが、元の方が解り易くまたその本質、未知なる者に対する興味を如実に表している為に、代案された言葉は定着していない。

因みに、当の本人達はというと、特にジョークの題材として扱われている事を気にしている訳では無く、ジョークとはそもそもそういうものであると、多くの者達がそうしている様に理解し、時には自らそれらを口にする事もある。

故に、これらを差別的言葉として禁ずるのはおかしいとする者もいるが、実際にその様な感覚で使っている者も事実である為、やはり、公共の場で使うのは自重するべきだろう。

他の有名なモンスタージョーク

Q:ゴブリンと戦って生き残るには? A:無理。諦める。

Q:ジャパニーズとエルフの共通点は何か? A:変態的に精巧な時計を作る所。

M i k i p e d i a - モンスタージョークの項目より引用

## 第一章

醒曆1880年 八月 詠霧趣西南部 イギリス サマセツト地方

嗚呼どうしてこんなに退屈で退屈で仕方が無いのかしら。

年季がかった木製の机の上に突っ伏して、傍らに置かれた花瓶の中に容れられている薔薇の葉を物憂げに引き千切り手で弄びながら、ロリーナ・ドジソンは、今日一日……まだ午後一時という所なので半日と言い直そう……だけで何度も口に出している言葉を、またしても心の中で呟いた。

学校が夏の休みに入り、ロンドン論臺からここ、グラストンベリーにやって来てもう一週間になろうとしている。しかし彼女は、こんな田舎でどう過ごしたものと、ずっと考えあぐねていた。

そもそもこの土地を選んだのは彼女では無く、彼女の両親だった。彼女達家族は、食うに困る程金が無い訳では無いが、さりとて働かなくとも良い程に金がある訳でも無い、絵に描いた様な中産階級に属していた。

だから両親は、猥雑で陰鬱な灰色の首都で過ごしている間に得たそれなりの貯蓄を使い、一ヶ月近くの間、何をするでも無く自由に穏やかに過ごそうと考え、ここを選んだに違いない。

違いない、というのは、父親も母親も、ロリーナに一言も相談せず、場所を決めてしまった為で、彼女はその事をずっと知らなかったのだ。

前日になって旅行の事を聞いた彼女は、強く反対した。保養地にしてももっと良い場所があるだろうに、と。けれどもその意見が聞き入れられて貰う事は無く、半ば無理矢理にロリーナはここまで連れて来られてしまった。

何時もそうなのだ。彼女の願いが、考えが、想いが受け入れられた事なんて一度も無い。子供の癖に口出しするんじゃない、と何時

も否定される。もう十三を数える年齢であるというのに。

そんな彼等は、実の娘を放って、田舎の自然と、歴史的な観光を楽しんでいる筈だ。この街の郊外には、あの英雄アーサー王が死して向かった約束の地、芳醇なる林檎の島アヴァロンの元になったと言われる丘があり、見渡しの良いその天辺には、天高く伸びる門が聳え立っている。他にも随所にその手の遺跡が転がっていた。だが先にも書いた通り、ロリーナはもう十三歳。御伽噺を信じる様な年齢では無いし、学問を志している訳でも無いから、大昔の、居たかどうかも解らない様な王様のお墓や廃墟になんか興味は無い。

こんな事なら、何としてでも論曇ロンドンに残るべきだったわ。

それでも余り変わり映えはしなかったかもしれないけれど、と、溜息を漏らしつつ、ロリーナはそっと手から薔薇の葉を離す。縁に付いたぎざぎざの、全体を覆うざらざらの感触が少し気に入っていたが、流石に飽いてしまった。今度は、ひらひらと板張りの床へ落ちて行く緑の欠片を目で追って行く。どんな風に回りながら落ちるのか、何処に行くのかを予測するのは新たな気晴らしになったが、それも僅かな間だけ。彼女は、葉の色より明るい新緑の瞳を伏せる。結局何処に落ちたのか確認する間も無く、葉は風に飛ばされて外へと飛んで行ってしまった。

再び瞳が開かれると共にロリーナは、窓辺に差し込む午後の光によって照り輝く、肩程まで軽やかに流れて行く黄金の巻き毛を振り上げながら、勢いをつけて身を起き上がらせた。椅子の背の上、行儀悪くも両手を枕代わりにして頭を乗せて、考えるのは、学校の友達ロンドンの事である。論曇の事を考えている内に、彼女達の事が気になっ

てしまったのだ。  
今頃何をしているだろうかもつと素敵な所で楽しく過ごしているだろうか、と。

特に気になったのは、あのアデル・ボールドウィンの事である。

仲の良い友達、と呼ぶには喧嘩が絶えなかった。というよりも、ロリーナが何かにつけてアデルにちょっかいを掛けるのだ。それで

良く言い合いになり、ついには殴り合いにまで発展させてしまふ。そんな関係だ。

何故そうしたくなるのかといえば、その反応が面白いからに他ならない。

アデルは、幾分無愛想だが、何事に対しても生真面目な少女で、他愛の無い一言でも本気で受け取ってしまう。何時だったかは忘れたが、年の離れた兄が父親と後を継いで警察官になるという事に彼女が愚図り、一悶着あったという話を人伝に聞いた時は、最高に愉快だった。授業の合間に、ロリーナはアデルへ、「お兄さんが危険な仕事に就くのが嫌なのね貴女。嗚呼何て兄思いな子なのでしょう。お兄さんの事が大好きなのよね。」と冗談半分に言つてやったのだが、そう言われた彼女は良く熟れた林檎の様に真っ赤にさせて俯いてしまったのだ。その表情が可愛くておかしくて、ロリーナは破廉恥にも大笑いしてしまった。人目も憚らず、涙が滲む程笑つた事はあれ以来無い。尤も次の瞬間、眼を吊り上げながらアデルが放つた掌によつて、ロリーナの頬も赤く染まつてしまった訳だが。

そんな事を思い出して、彼女はくすくすと笑う。

そしてまた、今あの娘は、大好きなお兄さんと一緒に居られているだろうか、と考えた。考え、考えて、それがどの様なものにして、自分には確かめる手段など無いのだという事に気付き、思い出し笑いを止める。

その思考と表情を賽の目の様にころころ変えるロリーナは、今度はまた憂鬱そうな溜息を發した。

答えの決して得られぬ物思いに耽るしか、ここではする事が無いのだ、本当に。

後は、即興で思いつく様な子供の手遊びか、或いは、何度『嗚呼どうしてここはこんなに退屈で退屈で仕方が無いのかしら。』という言葉が脳裏を過ぎったかを数えるか位だろう。ロリーナはその数を正確に覚えていた。今日起きてからの回数を合わせると、五十一回になる。朝の八時前後に起きた事を考えると、一時間に十回の勘

定だ。なかなか記録物では無いだろうか、我ながらに。

そう考えた自分に少し笑いながら、しかし余りのくだらなさに直ぐ唇を閉ざし、彼女は五十二回目になる『嗚呼』としてこんなに退屈で退屈で仕方が無いのかしら。』を無音で唱えようとした。

『嗚呼、』までが、空気を介さぬ言葉として紡がれた時、ロリーナの耳に馬の蹄と車輪の音が届いた。馬車だ。どうやら彼女達が滞在している宿の前に留まったらしく、馬の嘶きや御者の声が直ぐ傍で聞こえてくる。

ロリーナは、何気なく、宿泊している二階の部屋の窓から首を出し、外を見た。

途端に心臓が高鳴った。

まさか、と思ったが、自分がこの眼で見たのだから、間違えようが無い。

退屈、などと嘆いている場合では無くなった。妄想に華を咲かせる必要も、だ。

何せアデルでは無いが、自分の待ち人が、愛人がやって来たのだ。それもかなり予想外なこの瞬間にっ。

居ても立っても居られず、ロリーナは青いスカートを翻しながら部屋の外へと駆け出した。狭い廊下で通り掛かった若い女中を避けつつ走り抜け、誰も見ていないのを良い事に階段を三段一気に飛び降り、出口へと向かう。

両開きの厚い木製の扉を力任せに押し開けて外に出れば、涼しげな風が吹き抜ける空の下、あの人が今正に、馬車から荷物を下ろし、こちらへと向かっている所だった。ロリーナは駆け寄りながら、思わずに叫んだ。

「ハーバート叔父さんっ。」

地面に置いた大きめの旅行鞆を持つとしていた来客、ハーバートと呼ばれた男は、さっと鞆を降ろすと、

「ロリーナ、ロリーナじゃないかっ。」

両手を広げ、その細くもしっかりと筋肉が付いた胸の内で少女を

受け止めた。背中に腕を回して抱き付いたロリーナは、上品なフロックコートへ額を押し付けると、母猫に対する子猫の様に擦り動かし、その感触を堪能した。暫しの時間の後、満足して首を上に向けて、ぱつと真紅の華が花開いた様に笑みが浮かび上がる。そしてその唇からは、自分の肩に手を回して抱擁してくれている者に対する明朗快活な言葉が、まるで超蒸機関式紡績機によるものの如く、紡ぎ出された。

「お久しぶりハーバート叔父さん。帰って来たなんて知らなかったし、こんな所に来てくれるなんて思いもしなかったわ。お仕事は済んだ？今度は何処に行つて来たの？寅怒インド？阿真利火アメリカ？阿附利架アフリカ？それとも日本ジャパンかしら？嗚呼、野蛮な所に行つて、病気に掛かったりしてないでしょうね？」

それから一番大事な事。私に対するお土産はっ？」

矢継ぎ早に放たれる台詞に、ハーバートはそのロリーナの三倍以上になる年齢の割に皺の少ない整った顔立ちへ、少々の苦さを加えた味のある微笑みを浮かべながら、自分の小麦色の髪の毛よりも輝かしい色のそれにそつと手を乗せて、

「今日は、久しぶりだねロリーナ。

家に行つたらメイドにここだと言われてやつて来たよ、元気そう  
で何よりだ。

だが、幾ら元気だからって、そんな一気に語り掛けないでくれ。

僕の口は一つしか無いのだから、一度に全てを答える事は出来ない。  
い。

後で一つずつ、順番に、ゆっくりと語らせてくれよな。

まあ重要な事を二つ、先に言つて置いて上げよう。

僕は病人じゃないし、君へのお土産も勿論あるさ。」

「それはとっても愉しみだわ。何かあるのか、期待して待たせてもらうわね。」

髪の毛を抜ける心地良い指を感じながら、ロリーナは眼を輝かせてそつ応えた。

## 第二章

ハーバート・ドジソンはロリーナの叔父であり、彼女の父の弟に当たる人物だ。

父親は典型的都市市民、つまり保守且つ平々凡々な性格で、詠国本土から出た事も無ければ論曇ロンドンの外に行った事も数回という程の人物だが、そんな兄を見ながら霧の都で過ごしてきた為だろう、ハーバートの方は若い頃から世界各地を身一つで旅し、それをそのまま貿易という形で仕事にした、精力的な人間だった。

その為詠国外に居る事の方が多く、大体一ヶ月か二ヶ月周期で故郷に帰っては、ロリーナ達の元へやって来る。もう既に結構な年であるのだが未だ妻子は居らず、彼女達一家が家族の様なものだ。

そしてそれは兄夫婦側も同じで、ハーバートが帰国する度に、各地の奇妙な話を聞いたり、土産を見たりするのを愉しみにしている。父親も母親も自分達で行こうとは思わない人間なので、異国の知識は珍しいのだ。

「寅怒インドという国は何度も行きましたが実に面白い。

行く度、行く度に違うものが見えてくる。たとえば、  
「  
勿論ロリーナも、その叔父の事が好きだった。」

夜ともなり、宿へと戻って来た両親達と彼女の前で、ミルクたっぷりの紅茶を片手に旅行先の体験談を饒舌に、雄弁に語るハーバートの日に焼けた端正な顔立ちは魅惑的で、彼の姪をうっそりとした気分になんてさせてくれる。

相変わらず何て素敵で素晴らしい人なんだろう。

グラストンベリーでの生活に退屈していたロリーナの中で、その思いはとどまる事無く高まって行き、話が佳境に入る頃には、最早辛抱出来ぬ所まで到達した。

ロリーナは、頬を薄く染めると、話に感心して仕切りに相槌を打つ両親の間で隠れる様に、そっと両手で包み持ったティーカップの

縁を、右手の人差し指で一回、二回、三回と叩き、そこに唇を付けた。中にたつぷり入った紅茶は口に含まず、じっと叔父の方を見つめながら。

立ち寄った村で恐れられていた、悪神群・阿修羅<sup>アスラ</sup>の化身と呼ばれていた少女の話をしている最中、ハーバートはその視線に気付く。すると、よくよく注意しなければ解らない程度に眼を細め、唇を吊り上げると、彼女と同様の仕草をもっとさり気なく、上手に行つて見せた。トントン、と。

それは二人が取り決めた合図だった。受け入れられた事を知ったロリーナは小さな安堵の吐息を吐きつつ、紅茶を一気に飲み干した。そして談話もお開きとなり、夜が耽り出した頃。

ハーバートが当日に取った部屋に、ロリーナの姿があつた。

蝋燭の灯りが一つぼんやりと辺りを照らす中、質素な一人用のベッドの前で、二人は抱き合っている。

それは叔父と姪という関係からすれば、聊か不謹慎な程に密着したものだつた。

「君にも困つたものだな、ついて早々とはね。

そんなに我慢が出来なかつたのかい？」

僅かに背を屈め、耳元に唇を近づけながら、ハーバートはそう囁く。

「んっ……だつて、ここ退屈で退屈で仕方が無かつたんだもの……。」

吹きかかる息に身を震わせ、ロリーナは恥ずかしそうに返した。

これで五十三回目になる言葉を、心の底から想いを込めて。

叔父は「悪い子だ」と、姪を嗜める様な、しかし優しい声音で再び囁くと、その唇と彼女の唇を重ねながら、衣服の方に手を伸ばす。無数のボタンが手早く外され、スカートがずり落ち、下半身がドロワーズだけとなるのを感じながら、ロリーナは小さな舌を震わせ、ハーバートの接吻に応えた。同時に手が、そつと茶のフロックコー

トを脱がす。二人は互い互いに唇を奪い合い、その中へと己が唾液を注ぎ込みながら、各々の肌にわざと触れつつ、その衣服を一枚一枚脱がして行く。全てが無くなり、生まれたままの体となった二人は、抱擁したままにシーツの白い海へと飛び込んだ。そして、皺の大波を掻き立てる様に、ハーバートはロリーナのまだ成熟していない妖精の様に白い体を、荒々しく愛撫し始める。唇と唇を重ねながら、手は華奢な足を撫でて小さなお尻を揉み回し、薄い胸に付いた突起を鋭く捻る。その度に少女は、ピアノが鍵盤を叩かれて音を出す様に抑えられた可愛らしい声を上げて泣き、徐々に熱を持って行く細身を押し当てると、その両腕を男に絡ませる。

二人がこの様に性的な関わりを持ったのは、今から一年前、ロリーナ十二歳の誕生日の事だった。その日彼女は、幼い頃から見初めていたハーバートに向けて、愛の告白をした。酒が入っていたという事もあるだろうが、元々そういう気質と、同時に情愛があったのだろう、彼は受け入れ、その身を貰い受けた。それは本来少女が望んでいたものでは無く……というよりも、まだまだその手の知識には疎かった……苦痛を伴うものであったが、しかし時と共に慣れてしまった。今ではこの有様で、隙を見つけては愛を確かめ合っている。

当然ながらドジソン夫妻はこの事を知らない。もし知る所となれば、許す筈も無いだろう。確かに、まだ近親婚は珍しいものでは無かったが、年齢が年齢である。

また彼等は普通の、性に厳格なヴィクトリア市民に過ぎないのだから。

かく言う訳であり、ハーバートもロリーナも、ばれぬ様細心の注意を払っていた。今回だって、田舎故一部屋に置けるベッド数が少なく、娘と両親が別々の部屋に泊まっていたからこそ、抜け出せたのだ。でなければ、深夜に男の部屋を訪れる事なんて、叔父と姪であつても流石に出来かねただろう。怪しまれすぎる。

また彼等は、身体的にも痕跡が残らない為に工夫を凝らしていた。

ハーバートの愛撫の果てに、ロリーナは切なげな声を上げながら、臆病な獣が格上の存在に服従する様に四つん這いになると、突き出した腰の下、丸く締まったお尻に両手を這わせ、窄まった肛門を、皺が広がってしまう程に押し広げた。そこへハーバートは、いきり立つ男性の象徴を向けると、槍を突くかの如く腰を突き出し、それを中へと入れた。くぐもつた悲鳴を上げながらも指は離さず、中ではしかと締め付けながら、ロリーナは男を啜え込んだ。

肛姦は、快樂のみで生産を伴わぬ性交として、同性愛、自慰行為と共に多くの宗教、皇州（ヨーロッパ）では<sup>キリスト</sup>殊基督教において禁忌とされており、中世の一例だとそれを理由に魔女として断罪された事もあった。

しかし、しばしば人類は性的快樂を求めるものだ。同じ理由で中絶もまた禁じられている以上、妊娠しない為させない為、肛姦は隠れて行われてきた。

ハーバートとロリーナも貞操を守る為に、その交わりを望んだのだ。

自らの中を抉って行く熱く硬い肉棒を感じながら、形式上の処女はシーツを掴み、声が漏れ出ない様、更にそれを噛んで、下から全身を貫く衝撃を味わった。最初こそ違和と苦痛を感じていたが、今では快感と刺激のみが直走る。自分と、また相手が悦楽の極みに達しようとしているのを感じ、ロリーナは唾液の染みを広げ、その指に力を込めた。直に炎の様に熱い性の塊が吐き出されるのだ、と思うだけで、体が打ち震えてしまう。

けれどもロリーナの心は何処か冷めていた。指でがっしりと掴まれたお尻をこれでもかと激しく突かれ、それに対ししっかりと体が反応しているにも関わらず、頭の奥では冷静に、ある事をずっと思考していたのだ。

違う、と。

確かに心地良い。

刺激は快感であり、その激しさの中にハーバートの愛を感じても

いる。

だが違う。何か、何か足りない。

肛姦だから、という理由とは違う。きっと通常の、膣を用いた性交であっても、同じ事を考えただろう。相手が自分よりも遙かに年上の相手だから、とも違う。寧ろそれを望んでいたのだから、有り得る訳が無い。

じゃこれは何なのかしら？ この満たされない感覚は？

叔父さんに抱かれている最中、こんな事を考えてしまっている自分の有様は？

頭の奥でその答えを探すロリーナだが、ハーバートはそんな事など露知らず。

実らぬ大量の子種をその中で吐き出されて少女の脳裏は猛烈な暑さによって真っ白になり、彼女は呻き声を上げながら絶頂を迎えた。

### 第三章

そして気がつくくと、ロリーナは独り、自分の部屋のベッドの上で寝ていた。

窓から差し込む日差しが心地良い。外を見やれば、朝日と呼ぶには聊か登り過ぎな太陽が輝いている。どうやらあのまま眠ってしまったのをハーバートが運んだ様だ。

服は着ていない。脱いだそれは畳まれて、椅子の上に置かれている。

彼女は着替えようとして起き上がり、首から下がっている鎖に気がついた。胸元まで垂れたその先には、楕円形にカッティングされた、青い輝きを濃く煌かせる上等のサファイヤが付けられている。

寅怒<sup>インド</sup>だと、カシミール地方で取れるものが高品質な事で有名であり、恐らくはそこから取れたものであるう。

ハーバートが言っていた土産とはこの事だったのねとロリーナは微笑み、満足そうにそれを見つめた。そして彼女は彼に礼を言おうと、改めて起き上がり、新たな……サファイヤの青が映える様な赤い……服に着替え、部屋の外へと出た。首飾りを手で弄びながら廊下を歩み、昨夜自分と愛人が情事を共にした部屋の前に立つと、扉を軽くノックする。

返事は無かった。

もう二度、三度やっても中から声がする事は無く、ドアノブに手を掛ければ錠前が耳障りな音を立てる。訝しがっていた所に丁度良く女中がやって来たので、ロリーナはこれ幸いにと尋ねて見た。

「お早う。ねえちょっと聞きたいんだけどさ。」

「ここに泊まっている人、何処か出掛けた？」

「お早うございますお客様。」

ああ、そちらの部屋の方でしたら、別のお客様と出掛けられましたよ。」

恐らくはこの宿を営む者達の娘なのだろう、まだ少女と呼ぶべきその女中は、僅かに頭を下げながらそう応える。

その望まざる答えに、ロリーナの心は聊か傷付き、同時に腹が立った。

普通、あんな夜の後の朝に、恋人を放って遊びに行くかしら。

勿論そうせざるを得ない理由はあるだろう。一緒に行った『別のお客様』とは、明らかに彼女の両親の事だ。一ヶ月ぶりに出会ったのはロリーナだけでは無い。父と叔父がその血の繋がりを、母と叔父が家族の関係を深めようと観光に誘ったとしてもおかしくは無し、ここでは他にする様な事も無い。当然と言える事だ。恋人が寝ていたとしても、その仲は秘匿されているのだから、それを理由に兄弟及び義兄妹の親睦が拒否される事などありえない。加えてその恋人は疲れ果て、ぐっすりと眠りに落ちていたのだから。具体的な時間は解らないが、太陽の位置からすればもう午前が終わるのも近いだろう。

だが理由を挙げ連ねても、そんなものは頭で生み出されたものに過ぎない。

胸の中で形作られて行く感情を収める為に、それらの思考は少々弱過ぎた。

置き去りにされた事で、ロリーナは態度と表情でそれと解る程機嫌が悪くなる。

どうせなら起こして一緒に連れて行ってくれても良いじゃない、と彼女は思った。ハーバートは、彼女を子供だからという理由で区別、差別なんてしない人間だ。頼めば父を説き伏せてくれただろう。嗚呼、それをしなかったのだから、やっぱりあの人が悪いわね。

ロリーナは、聞く者が居れば身勝手な物言いと咎める様な事を思うと、肩を苛立たせて部屋へ戻ろうとした。どうせ皆帰るのは夕方か、少なくとも午後になってからだ。ならば何時までもここに居ても仕方が無い。部屋に戻ってまた無為に時を過ごそう。帰って来たハーバートを叱責する事を願いつつ。

「あの、」

その時彼女の背中に向けて、女中が声を発した。

「何？」とロリーナは機嫌悪そうに振り返ると、その顔へ眼をやった。癖の強い赤毛にそばかす交じりの頬といった垢抜けなさはあるがそれでも決して器量の悪い訳では無い、田舎の華と呼ぶべき相貌を朱に染めて、女中は何か言いたげに俯きつつ、白いエプロンドレスの中ほどを握っている。

「……何かしら。用があるならさっさと行って欲しいんだけど？」

煮えきらぬ少女の態度に、ロリーナは尖った言葉をその強張った唇より発した。

「……。」

それでも女中は所在無さげに下を向いたまま、顔を赤らめているだけだ。

ロリーナは胸をむかつかせながら、再び語気の強い催促の言葉を上げようとし、はたとある可能性に気付いた。

嗚呼この娘もしかして

そうして彼女は、心の中からぽつんと浮かび上がったその可能性を、不機嫌故に酷く嫌味っぽく口に出した。

「……嗚呼……何が言いたいのか解ったわ。」

貴女……聞いてたのね？この部屋の中で何があったのか、を。」  
その台詞に女中の小さな肩はびくりと飛び上がった。同時に赤い頬はその髪の毛の色と同じ位に紅く染まり、眼は頭一つ小さい同年代の少女から逃れんとするかのように、四方八方へと泳ぎ回る。

やっぱりね、とロリーナはにやりと笑みを浮かべた。この宿の部屋の壁はそれ程厚く無く、床だって決して頑丈なものでは無い。間の離れた両親の部屋まで聞こえる筈は無いが、隣や下の部屋なら異変を察せられただろう。そして一階は、宿主の家族が寝泊りするのに使っているのだ。

そして更にロリーナは、女中の方に一歩近付くと、再び鋭い言葉を投げ突けた。

「女中なら貴女、私とこの部屋の人がどういう関係かは解ってるでしょうね。家名は一緒なのは、宿泊帳を見れば丸解り。ええそう、そういう事。私達はそういう関係……それで？それを知った貴女は私をどうするつもりかしら。黙っていればそれで済んだのに、声を掛けたって事は何か考えがあったって事よね？何かしら？お金を集めるつもり？私達の関係を、ばらして欲しくなければ、ってね。」

「いえそんなつもりはっ。」

捲くし立てる様に放たれる台詞に、女中は色めき立ち、慌てて顔を上げると、必死にそれを否定する。

その反応で、胸に溜まっていたものが薄らいで行くのを感じつつ、ロリーナはもう一步踏み込んで言った。脅迫を目的としたもので無いと言うならば且つ自分と同じ年代の少女ならこういう事でまず間違いないと、我ながら驚くべき頭脳の回転によって導き出された解答を口にする。

「そう。じゃあつまり貴女は気になったのね？私と彼の行為が。」

それが凶星だったのだろう、女中は言葉に詰まり、うっと呻き声を上げた。

ロリーナは、ふふつと巻き毛を振るわせつつ、そつと耳元に唇を近づける。

「気になるんだ。それで声を掛けたのね。いいわ、教えて上げる。どんな感じでどんな風か、ね。」

そうして語られようとした言葉はしかし、女中に伝わる前に潰えてしまった。微かな息を吹きかけつつ、ロリーナが唇を開いた矢先、女中自身が大声で「失礼しますっ」と言うや否や一目散に逃げ出してしまったからだ。

まるでアデル・ポールドウィンみたい。

初心な態度がとつても可愛らしいと思ったらありやしないわ。

去り行く背中を眼で追い駆けながら、ロリーナはクスクスと愉しそうに笑った。

その様な女中の反応によって、目覚めてから直ぐに悪くなっていたロリーナの機嫌も幾分かは良くなった。けれども完全に戻った訳では無く、結局その日の残りの時間も、彼女は鬱屈した気分ですべてに籠っていた。

故に彼女は、夕方、父と母、叔父が帰って来ると、直ぐに彼の元へ駆け寄って、

「お土産ありがとうございます。」

けど、一人だけ残して勝手に行くなんて酷いじゃない。」

と、そう僅かに頬を膨らませつつ囁いた。

対してハーバートは、年長者らしい包容力のある微笑みを浮かべてその黄金の髪の毛を撫でると、

「ああ、それは悪かった。」

けど君も悪いんだよ、僕を放っておいて勝手に寝ちゃうんだからね。」

まあ何、君のお父さん……僕の兄貴が、面白い土産話を聞かせてくれるから。」

そのまま先へ行くロリーナの父に続き、宿の中へと入って行ってしまう。

何が土産話よ、と彼女は憮然としたままだったが、しかし少し興味はあった。

父の事だからどうせ大した事では無いとも思う。

それでもこの不満を少しは解かしてくれるだろう。

その様な僅かばかりの期待を込めて、今宵も開かれた茶会に参加していたロリーナだったが、父の話、今日自らが見たという存在については、隠し切れぬ驚きを示すと共に、非常な好奇心を沸き立たせられた。

正午が少し過ぎた位の頃、父と叔父、そして母は三人別れて森の中を散策していた。遺跡では無く唯の森、という辺りがロリーナには理解出来なかったが、『自然に帰れ』という事なのだろう。実に

古臭い思想だ。

そうして独り森の奥へと進んで行った父は、そこで葉がこすれ合う音を聞いた。

一体何だろうと、音がした方を向いた彼は、たちまちに仰天した。高く聳え立つ二つの木々の間で、一頭の白い馬が立って、こちらを見つめている。まだ小さく、生まれて間もないといった様子で、肌を通して薄っすらと血管が透け出ており、まだ短い鬣がそよ風で揺れていた。

だが、そんな事よりもっとずっと印象的だったのは、その頭部から生える一本の角だった。細く長く、螺旋を描きながら天へと伸び行くそれは、言い知れぬ美と、身震いしたくなる様な威厳を称えていた。

#### 一角獣。

今醒紀に入り、神話の中にのみ生きていた幻獣達が、現実の生物として相次いで確認されているのをロリーナの父も知っていたが、しかしまさかこんな所で、それも自分が遭遇する羽目になるとは。

そう暫くの間、父はただ呆然と立ち尽くしていたが、我を取り戻すと白い一角獣の元へ歩み寄ろうとした。もしその時父がもっと冷静だったならば、一角獣に関する言い伝えを思い出していた事だろう。だが彼にその様な余裕は無く、ただもつと見たい触りたいという一心で、近付いてしまった。

そして案の定、処女以外に懐かないと言われるその獣は、父が動くや否や直ぐに身を翻すと、あつという間に森の更に奥の方へと駆けて行くと、現れた時と同じ葉音を立たせながら去って行ったという。

「まあ……そんなものがこの近くにいるだなんて。」

話を聞き終えたロリーナは、わざわざ口に出す事で、改めて事実を認識した。

何も無いと思っていたけれど、面白そうなものがある、いや居る

じゃない、と。

母も叔父も、大なり小なり今の話には懐疑的だったが、少女の心は興味で一杯だった。だからだろう、彼女は、ちらりとハーバートの方を見つつ、父に向けてこう言った。

「ねえ父さん。私もその一角獣を見てみたいわ。」

明日、一緒に森へ連れて行ってくれない？」

その言葉に、母も含めた両親は目を見開いて驚き、森は危険な場所で大変な一人娘に何かがあっては困る、一角獣は下品で凶暴な生き物とも言われているのだと、口々にまくし立てる。

「まあまあ、良いじゃないですか。」

彼女ももう立派な貴婦人であるし、それに僕が付いて行きますよ。

それへ苦笑いを浮かべつつ制したのは、ハーバートだった。

愛する姪の頼みとあつて、無碍にする事は出来ない。

彼が、どうせ本当に居るかどうかも解らないのだし、と言えば、両親共に黙る他無かった。ロリーナは感謝の言葉を述べると、彼の背中に腕を回し、逞しい胸板に顔を摺り寄せた。

だが、ハーバートはハーバートで、別の事を心配していた。

鼻に掛かる金髪に擦ったそうにしながら、彼は彼女の耳元で囁いた。

「もし一角獣にあつたら、嘘でも良いから懐かたつて言うんだよ？解ってるね？」

一角獣は処女に懐くというが、『処女』の頭には『心の清らかな』という言葉が付くともいう。精神に対する清濁の基準などなかなか判別出来るものではないが、叔父と秘事に及ぶ様な娘が清らかなのか、という微妙な所だろう。またその行為も宗教的禁忌に触れたものだ。確かに彼女のその体は、純潔といえば純潔であったが、あの意味では街辻の娼婦よりも余程不純と言えよう。それを一角獣にひいては世間に見破られる事を恐れてのその言葉をロリーナは不快に思った。

何よ偉そうに上から言っ  
て。私をそんな風にしたのは貴方じゃない。

そして彼女は、僅かに眉間に皺を寄せながら、半ば冗談めかして、「解ってるわよ。けれど、関係無い。その一角獣、私の虜にしてやるんだから。」

貴方見たく、と囁き返すと、ハーバートの背中を指で抓る。  
うっ、という小さな呻き声が、ひん曲がった唇より上がった。

## 第四章

それでその日はお開きとなり、ロリーナもハーバートと夜を共にする事無く朝がやって来た。叔父の言葉に気分を悪しくされた彼女だったが、一晩眠って目が覚めてみれば、そこには一角獣という未知なる生物に対する好奇心だけが残っており、清々しい朝日に照らされたその顔は健やかなものであった。

そうしてロリーナは父、母、叔父と共に、一角獣を見たという森へと向かう。動き易いズボンとブーツの狩猟服に赤いストールを掛け、枝避けの鉈を右手で振りながら進む姿は軽快そのものだ。歩くのが早い為に、何度も止まる様大人達に言われるが、勿論そんな事など一向に聞こうとしない。ここに来て以来ずっと感じていた退屈を活動によって癒す様に、やがて昨日父が話していた森へと辿り付くもその足取りが代わる事は、一向に無かった。

「全く、そんなに見てみたいのかい、一角獣とやらが。」

両親が遅い為に、放って先へ行くロリーナの背後から、見兼ねたハーバートがそう語りかける。追い駆ける彼の足取りも、彼女に合わせて早くなっていた。

「ええ、勿論。論曇<sup>ロンドン</sup>じゃ、絶対に見れないものだからね。」

でもきつと、論曇<sup>ロンドン</sup>以外でもなかなか見れなさそうだけれど。」

彼女はそう応えつつ、叔父が来るのを待たずに枝葉を薙ぎながら、緑深まる奥へと向かって行く。葉のカーテンを通して見える夏の空と、降り注ぐ光のシャワーもまた、超蒸機関が猛り狂い、幾千幾万もの人々が住む世界<sup>メトロポリス</sup>大都においては物珍しいものであるだろうが、ロリーナは気にも止めずに前に前へと向かい、

「あら……叔父さん？」

ふと振り向いた時には、彼女の後ろで歩いていた筈のハーバートの姿は見えなくなっていた。実は随分と前に彼を置いて来てしまっていたのだが、ロリーナはさもそれが叔父の所為だと言わんばかり

に小さな溜息を付く。

そして独りだけとなった森の中で、彼女はそっと周囲を伺った。どうやら、気付かぬ間に相当遠くにまで来てしまっていたらしい。

相応な樹齢を誇ると推測される木々が天へと伸びるその地面は、長い間に降り積もった深い落葉に覆われており、ここが人類未踏である事を、それがおおげさな表現だとしても人の出入りに乏しい地である事を告げる。鳥の囀りも、風の過ぎ行く音も何処か遠く、その様な事は無いと解っていても、妖精達が住まう異界に迷い込んでしまったのではと錯覚させる。漸く自身の配慮が足りなかつた事を悟ったロリーナは、戻る事が出来るかとその帰路を心配し始めた。

その傍らの林が僅かに蠢いたのは、その時だった。

はっとして彼女は身構えると、音のした方向へと青い瞳を向ける。視線の先にある小さな緑の茂みは、風の吹かぬ中で断続的に揺れ続けて何物かが潜んでいる事を示し、ロリーナはそれが現れる時を今か今かと待ち構える。

暫くの時が経っても変化は無かつた。

何だ気のせいかな、と視線を戻したその瞬間に、それはひょっこり顔を出した。

茂みの中から顔を出したのは、それは間違い無く一角獣だった。

その名前に相応しい特徴的な一本角の生えた頭をロリーナの方に向け、円らな黒い瞳でじつと彼女を見つめている。更に一步、二歩と近付いて来た事で露となった体は、彼女が父の話の中で想像していたよりもずっと小さく、数値的には同じ位に見え、またポニーに近かつた。

幻想の中の生物が、今現実として自分の直ぐ目の前に存在している。

その事実に向直し、ロリーナの心は昂ぶり、興奮で体を奮わせた。

一角獣も彼女を気に入ったのか、その良い方面における伝承通り、

無防備に近付くと、鼻頭を擦り付け出す。

「どうやら私は、この子が思う『清らかな心の処女』の条件に合致した様ね。」

皮革製のズボン越しに、白い肌から発せられる暖かさ、僅かな鼻息のくすぐったさを感じながら、ロリーナはすつと微笑んだ。ハーバート叔父さんが懸念していた事は、唯の心配過ぎであつたという言つ訳だ。

彼女が喜んでいるその気配を感じ取つたのだらう。

一角獣が、その角で傷付けぬ様注意しながら、首を挙げた。男装の少女を映し出す鏡となつた黒い瞳は、まるで年上の女性に恋する少年のそれだ。

熱烈なその視線にロリーナは思わずぞくりと震え、何処か上ずつた面持ちで見つめ返す。そして彼女は震える左手を伸ばすと、若草の如く茂る鬘をそつと触り、ゆつくりと撫ぜた

娘を心配する父と母、そしてハーバートの元に、ロリーナが戻つて来たのは、日も暮れ始めた頃合だつた。

来た時とは違い、鉈をストールに包んで抱え、土で服や顔を汚した姿に両親は酷く狼狽し、怪我は無いかがあつたのかと問い詰めた拳句、独りにさせた叔父の責任を声高く上げるも、当の本人は至つて健康そのもので、

「大丈夫、ちよつと木の根に転んじやつた拍子に、服が枝に引つ掛かつちやつただけだから。それよりも、ねえ、聞いてよ。私、さつき一角獣に出逢つたわ。ううん、出逢つただけじゃない。実際にこの手で触つたんだから。」

そう明朗快活に今日の出来事を語つて見せた。

母は娘のその言葉に疑いの眼差しを向け、父は自分の正しさに喜びを見せるが、両者共に、ロリーナが「それよりも」と切つて捨てた事の方に関心を寄せると、再度その詳細を求めて口々に質問し出した。なので彼女は、何度も何度も、大丈夫大丈夫だからと

肩を竦めなければならなかった。

だが、その様に鬱陶しい行為を受けても尚、ロリーナの機嫌は上々だった。

帰り道ではハミングまでしてみせる始末。

堪りかねたハーバートは、そつと尋ねてみた。

「ねえ君。さっきの事は本当なのかい？」

一角獣と出逢って触った、ってというのは？」

叔父の言葉に姪は、ふふんと鼻で笑うと、彼の体にしがみ付きつつ、

「ええそうよ。父さんや母さんや、貴方が心配する様な事は何も無かったわ。」

それ所か、ずっと心配していた事だつてこれで解決したのよ。」

「それは、一体どういう事だい？」

「内緒。でも直ぐに解るわ。」

愉しそつにそう応え、ハーバートを大いに困惑させた。

夜になつてもロリーナは上機嫌なままで、またそれはベッドの上でも変わらなかつた。性別と体格と年齢と経験が故に基本的に受身になりがちな彼女は今宵、何時に無く、かつて無く積極的だった。

皆が寝静まりかえつた深夜。ハーバートの部屋でロリーナは、自ら窮屈な狩猟服を脱ぎ捨て下着の一枚も纏わぬ完全な裸体となると、まだシャツもズボンも着たままの彼を押し倒し、上に跨つて何度も接吻をした。混乱気味の叔父等全く意に介さぬ激しさで唇を奪う姪は、まるで追い剥ぎか何かの様に強引な手付きでパートナーの服を脱がして行く。やがて互いに何も隠すものが無い姿になつてもロリーナの勢いは止まらず、手と肌で程良く鍛え上げられた男の体や茶に近い金髪に触れながら、蛭の様に舌へ舌を絡ませ、滾る唾液を啜り、啜らせる。

ハーバートは、年端も行かない女の子に半ば良い様にされ、また普段との違いに当惑するが、それを良い変化と前向きに受け止める

と、少女の愛撫に負けぬ様な手付きでその若い体を堪能して行く。

全身全霊を持って攻め、そして攻められ、ロリーナの体は燃え出さんばかりに火照り、抑えている割には大きい泣き声を上げた。そうして一度軽い高みへと達した彼女は、少し呼吸を整える程度に休んだ後、次の行為へと進もうとする。

普段であれば後ろの穴を用いた偽りの行為。

だがしかし、今回は、それすら違っていた。ロリーナは、犬の様にお尻を向けて這い蹲る何時もの姿勢では無く、その逆に、ハーバートに対して正面を向き、脚を広げた姿勢を取って見せる。それから自らの指を使って、潤いを称えている割れ目を、未だ男の象徴を受け入れた事の無い処女の証を中までくつきり見通せる様広げると、赤らんだ微笑みを浮かべながら言った。

「叔父さん。今日はこっちでやって、ね？」

「おいおい、それは不味いよ。」

僕は君を傷物にしたいく無いし、何かあったらどうするつもりだい？」

彼女の言葉へは、流石のハーバートも即座に頷く事は出来なかった。

だがロリーナは、躊躇する彼に向けてうつそりとした青い視線を送ると、

「傷物なんて何を今更。こっちの穴でしてない、ってだけじゃないの。」

それに、今回は絶対に大丈夫。だから安心して好きな風に入れていいのよ……ハーバート。」

背中を曲げてそそり立った一物へねっとり手を伸ばし、自らの秘所にそっと誘う。拒んでいたハーバートだったが、その艶かしい手付きと、魅惑的な誘い文句には適わなかった。君がそう言うのなら、とさり気なく責任を移し変えつつ、体を重ね、腰を前へと押し込む。互いに汁気を帯びたロリーナ自身とハーバート自身が触れ合い、滑った水音を立てた。その感触に息を荒げる彼女は、ぺろりと

舌なめずりをしながら間近に迫った彼の耳元で、こつ囁く。

来て、と。

その瞬間ハーバートは、本当の意味で叔父から唯の一人の男へと変貌した。

音を立てて豪快に理性が崩壊して行く中で、本能が発する欲望に従い、彼はロリーナへ、姪から唯の一人の少女へ、正に肉の棒と言ふべき己自身を突き立てる。指とも舌とも違う太く激しい衝撃、そして今まで純潔を守っていた肉の壁を突き通された苦痛に、ロリーナは思わず甲高い悲鳴を上げ、破瓜の血がつうと垂れて行く。だが、それも最初だけだ。あくまでもその部位だけが例外であつて、彼女の体は既に男を知っている……知り尽くしていると言つてもいい。愛液を受けて滑り良く肉棒が入りし始めれば、ロリーナは忍ちに順応し、快楽を求めて褻を蠢かす。その反応にハーバートは歓喜の声を上げながらも呼気鋭く腰を振り乱し、少女もまたそれを受け止める。

そうして二人が初めて行った真つ当な性交は、あつという間に執着へと至つた。

熟練の女性が持つ潤いに処女の狭さを持つ膣の刺激を味わうハーバートは、己の限界を察し、ずっと腰を引く。その行為をロリーナがぎゅつと抱きつく事で止めさせると、彼女は激しく首を横に振つて彼の行為を拒否した。

それだけは不味いつ、と男は言おうとしたが、蠱惑的な少女の瞳の前で、自分を抑える事は出来なかつた。

ハーバートはその腰を、ロリーナの股へと密着させるとそのままに、性への昂りを彼女の中へと放つた。通常の倍近い量を持つて出された精液は、同じく絶頂へと至る処女の子宮を十分に満たし、僅かにその腹を膨らませる。

自身の内側で広がって行く炎の様な熱さに、ロリーナは感歎の溜息を漏らして、その余韻に浸つた。

「大丈夫、だつた？痛みは？」

性欲を充実させ、知性の糸をより戻したハーバートは、胸の下で放心している彼女に心配そうに尋ねた。ロリーナは、冷め止まぬ興奮に火照った顔に笑みを浮かべると、ぐっと首を縦に振って見せる。

「全然、平気……とつても気持ち良かったわ。まだ、足りない位

」

そう言う彼女がぱりと身を翻した。すっかり油断していたハーバートは、うおっと声を上げながら、ロリーナの下に移される。位置を逆にし、彼の上に跨りながら、彼女はにんまりと笑みを浮かべて言った。

「ね、もう一回しましょ……違うわ、一回だけじゃない。もっともつと、夜が更けるまでっ。」

「それは構わないが……少し、休ませてくれよ。」

僕は出したばかりで、とてもじゃないが、

苦笑いを浮かべながらハーバートはそう返答しようとした。だがロリーナは、返事を待たずにその胸板へ手を置くと、勢い良く自ら腰を振り始める。大抵は一回、多くても二回で疲れ果てて寝てしまふ十三歳の……それもついさつき、紛いなりにも初夜を終えたばかりの……少女とは思えぬ行動に、彼は目を白黒させながらも、その心地良さに一度果てて萎えていた一物を半ば無理矢理に滾らせ、快楽を味わい出した。再びそり立てられた硬い棒の刺激に、ロリーナもまた歓声を上げながら、凄まじい勢いで腰を振り乱して行く。

彼女は今、これまで生きてきた中で始めて心の底から満たされていた。自身が一体何を望んでいたのかを悟り、その願いがままに動いているのだから。

二回目の絶頂を迎えても尚止まる事を知らぬ交わりに、下にいるハーバートは苦しい笑みを浮かべながら、待つてくれと言う、いや乞う。だがロリーナは、見事な三日月形に唇を吊り上げると、逆に

その腰の動きを早めた。

その彼女の脳裏に恥らうアデル・ポールドウィンと、泣きそうな宿の女中の姿が過ぎる。更にその二人に、丹精な面立ちを疲労と混乱で歪めたハーバートの姿が重なって、ロリーナはますます笑みを強めた。

これこれよっ、これなのよっ。私が求めていたのは、正にこういう事なのよっ。

頭部を覆う金色の巻き毛を、両手でくしゃりと握り締め、彼女は嗚呼と多大な愉悦の籠る吐息を発した。

ロリーナの、その魂が望む究極の願い。

それは人間としての、生物としての精神的優位だった。

相對する者の弱さに付け込み、その心を完膚無きままに陵辱する事は、肉体的に遙かに優れている雄、男達を性的魅力で屈服させる事は、即ち自分が彼等よりも上に座している事を知らしめるものである。

静寂に包まれたあの森の中で、無垢なる獣を我知らずに握り締めた鉦でくびり殺し、堪え難い魅力によってその神聖なる血を啜り舐めた事により、ロリーナはそんな、後世の者達がサディストと呼ぶ本来の己を自覚した。

同時にその血は、彼女の心だけでなく、肉体をも変貌させていた。比喩表現として、しばしば品性無く使用される『下の口』は、語彙通りのものになっていた。交われれば交わる程に相手の精力を奪い取り、ロリーナは強く、逞しくなっていく。ハーバートの顔が老い出して見えるのは、決して疲労の所為だけではあるまい。

嗚呼きつとこの人に私が惚れたのは、これがしたかったからなのね。

自信に満ちた態度、ハンサムな顔立ち、肉感的な体格。それを、ロリーナ・ドジソンという少女の力によって圧倒してみたい、捻じ伏せてみたい。無意識にそう感じたが故に、彼女は年上の叔父に惹かれたのだろう。

その逆に、長い間ロリーナの方が導かれてきたが、今は違った。導くのはハーバートじゃないわ、この私、この私よっ。

最早息も絶え絶えな彼の上で。

騎士が馬に乗る様な姿勢のまま快感を得る、奪い続ける彼女は、そつと耳元で囁く。

「貴方にも困ったものね、こんなに早くばてちゃうだなんて。

そんなに辛抱出来ないのかしら？……悪い子ね。」

その言葉に應える力すら、ハーバートには残されていなかった。

このまま交わり続けたらこの人老いて衰弱して死んじゃうかしら。

そうロリーナは思った。

だが、それもまた良いかと思ひ直す。自らの中で老衰する様を見たかつたし、彼が居なくなっても、跪かせる者、誘い込む男など腐る程居るのだ。

そして獲物を狩り立てる為の罠もまた、この手に握られている。

幻獣すら欺いた、清らかな心を持つ処女という肩書き。

その体面を繕う為の、靈験新たなかな秘薬を。

何も問題無いわ何も、何も、何も。

それよりも今はこの快樂の中に身を浸しましょう。

ロリーナは自分で自分の言葉に頷き返すと、ハーバートの唇を奪いながら、ますますその動作を激しくさせる。

軋むベッドの下。

衣服と共に持って来られたストールの中、生々しい血の跡がこびり付いた鉈と共に包まれた、あらゆる傷を癒すとされる角を持った首だけの子馬は、赤い闇の内側へとその虚ろな瞳を向けていた。

第四章（後書き）

Q・何故一角獣は絶滅したのか？

A・処女にほいほい付いて行っっちゃったから

『処女と一角獣が戯れていた』 在りし日を懐かしむ近世皇火の言  
い直し

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9175d/>

---

処女と一角獣 An Endangered Species

2008年11月7日09時21分発行